

初春の人の秋篠稲穂



交樂症

1937
書

に艦母を土國 !年少て立の飛





男 萬才 竹本濱太夫
 女 萬才 竹本津磨太夫

ツ
 レ

竹本 七五三太夫
 野澤 吉三郎
 豊澤 團伊三
 豊澤 廣二
 鶴澤 一良右衛門

【書】の部

花はな競くわい四し季き壽ことぶき

景事として夙く文化六年二月御霊社内の芝居に上演せられてゐます。春は萬歳、夏は蟹の汐波、秋は關寺小町冬は驚娘の四段返しで優雅な所作模様として初春にふさはしいものであります。

これは百四十前に三代目鶴澤友次郎師の作曲で、其後三代目野澤吉兵衛師が改訂をし五代目友次郎師の時に至り毎年正月一門相集り、式三と共に弾くのが吉例となり現在まで約六十年間の慣例をひいたもので、今日鶴澤宗家十種の内にあげられてゐます。

(床本) 花競四季壽

まづ初春のあしたには門に松立、壽を祝ふ鬘斗目や、のし昆布、千代と譲り葉あざやかに告げて行らん鶯の聲も長閑き春のそら、實に九重の、賑々と、いつまでつきぬ竹本の其一節の世を込幾萬歳と祝ひける。徳若に御萬歳と御代もさかへまします、愛敬ありけるあら玉の年立

人形役割

男 女 海 海 關 鷺

寺

萬 萬

小

才 才 士 女 町 娘

ツ

レ

吉 桐 桐 吉 桐 吉 桐 吉
 田 竹 竹 田 竹 田 竹 田
 光 龜 門 榮 紋 光 龜 玉
 造 松 造 郎 司 造 松 市

鶴 竹 豐 鶴 野 豊 竹 竹 豊
 澤 澤 澤 澤 澤 竹 本 本 竹
 清 團 新 燕 松 づ 津 濱 松
 廣 作 郎 三 輔 づ 磨 太 島
 廣 作 郎 三 輔 づ 磨 太 島
 廣 作 郎 三 輔 づ 磨 太 島

坂の關の清水に影うつる老の姿のア、ア、、、恥か
 しゃ、彼深草の少將の雨の降夜も嵐の吹夜も吹かぬ夜も
 思ひにきへし其報ひア、我實古へは花の姿といはれしも
 いつの間にか衰へて、生者必衰の理りは只目の前と恐ろ
 しゃ、因果は廻り車のしどに百夜通へど空言を誠とおも
 ひつもりしはさい生の山高く、生死の海深き其怨念の添
 やらん、今様にものに狂ふぞやう、つらふものは、世の
 中の人の心の花や見る、餘所の見目は戀すりやゆかし
 いとしかはゆさがそれが眞實ならば、そのオなんく
 情けのそれが誠か、てんと誓文二世三世嬉てへ、ほんに
 くへ、浮が中にさ樂しみ心付いて身纏ひいざやとたつ
 て、關寺の柴の庵りに歸りけりく、忍ぶ山、口舌の種
 の戀風が吹共傘に雪持て積る思ひは猶も幾重か重る思ひ
 ちらす、外山の雪をくゆらす、炭釜に冬籠りせし一枝を
 春待顔に初花の咲かけんとやちうく、と梢に宿る白鷺が
 霜毛を脱で羽たゝきの雪は花りよ花多き六つの花でうち
 らりく、扶かざしてしほらしや白雪のくはらへど
 く降りつもる花と見紛ふ雪や氷を見ながらも袖をかざ
 して立寄れば、それは木々の花切くべて樂まん、酒にい
 さや遊ぶらん、四季目前に有難や、雨土恵みの青人草の
 く盡せぬ眺めぞ樂しけれ。



菅原傳授手習鑑

車場の段
 茶筌酒の段
 喧嘩の段
 訴訟の段
 櫻丸切腹の段
 寺子屋の段

車場

の段

松王丸 (豊竹) 伊勢太夫

梅王丸 (豊竹) 富太夫

櫻王丸 (豊竹) 千太夫

杉王丸 (豊竹) 八十太夫

時平 (豊竹) 松島太夫

(豊野) 源太夫

茶筌酒の段

竹本七五三太夫

「忠臣蔵」「千本櫻」など、並んで「菅原」は義太夫淨瑠璃作品中、御承知の如く代表的な演しもの一つであり、文字通り屈指の名作であります。

初演は今日より百九十五年前、即ち延享三年八月、(二四〇六)大阪の竹本座の勾欄にかけられました。作者は當時の名作者竹田出雲はじめ、並木千柳、三好松落、竹田小出雲の合作で、全五段の場割は、大序大内の段から口加茂堤の段で齊世親王と苅屋姫との滯事を後の伏線とし、切の筆道傳授の段が四段目の寺子屋と相照應する構成、跡は門外。二段目は道行。口が汐待の段、切は道明

喧嘩の段 鶴澤綱造

鶴澤源太夫
鶴澤燕太夫
鶴澤雛三郎
鶴澤本新三郎

訴訟の段

竹本住太夫
鶴澤重造

櫻丸切腹の段

竹本相生太夫
野澤吉五郎
豊澤仙太夫
豊澤呂太夫

寺子屋の段

竹本丈隅太夫
鶴澤清八
竹本重太夫
豊澤廣助

寺で杖折檻、八聲鶏、丞相名残の各場面、三段目が今回上演の、口が車場、切は佐太村の茶釜酒、喧嘩、訴訟、櫻丸切腹と展開し四段目は筑紫配所、天拜山の飛梅、北嵯峨の隠れ家、寺子屋となるのであります。今日一部に流行して居ります「松王屋敷」と云ふのは後世の蛇足で筋から云へば寺子屋の前になるのであります。五段目は大内の段で時平一味の最期で結末をつけて居ります。

菅原道實公の事績については今更申上げるまでもありませんが、道實公が、左大臣藤原時平の讒言により筑紫に配流の身となり、太宰府に命を終へられたのは醍醐天皇の昌泰三年二月の事と傳へられます。當時の天下の同情は、翕然としてこの温厚篤學の公に集りましたが、恰もその頃、都に火災がしばしば起つたり、時平一味のものが相ついで病死したり、清涼殿に落雷があつたり、神變不可思議な出来事が頻發するので、折も折とて上下こぞつてこの變災を、罪無くして配所に歿した菅公の崇りと信じたのであります。畏くも一條天皇は、寛弘元年道實公に最高の位を贈り給ひ、北野天神に行幸あつて此處に菅公を合祀して、その靈を慰められ、以來天神様と云

人形役割

車場の段

梅	松	女	女	女	仕	時	杉	櫻	梅	松
王	王	房	房	房			王		王	王
丸	丸	は	八	千	佐	丁	平	丸	丸	丸
		る	重	代	太	大	吉	桐	吉	吉
吉	吉	桐	吉	吉	村	吉	田	竹	田	田
田	田	竹	田	小	の	田	竹	光	玉	玉
玉	玉	紋	榮	兵	段	玉	紋	龜	市	助
市	助	司	三	吉	い	徳	昇	造	松	市
		郎	郎							

へば恰も菅公の別稱のごとく考へられるに至つたのであります。

これを戯曲化したものは謡曲「雷電」をはじめ、古く宇治加賀椽の語り物の中にもあり、大近松の「天神記」は直接この「菅原傳授手習鑑」の藍本となつて居ります。

初演當時の竹本座は不入續きで經營困難に陥つて居たのでありますが、本編が上場されるや、全大阪舉げての大人氣で翌年の三月まで、約八ヶ月間の大入を續けました。その原因は、作柄が優れて居ることは勿論でありますが、當時大阪で唯一の人氣神である天満天神の菅公を中心人物に仕立てた所もその人氣を煽つた所以の一つであります。殊に作者出雲は、當時の社會記事を巧みに取材して脚色して居ります。この作の生命になつて居る梅王、松王、櫻丸の三ツ子の兄弟と云ふ着想は、當時大阪市中にあつた事實で、健全な男子の三ツ子が生れ、お上より鳥目五十貫を下賜され、嘉憲により舍人として牛飼に御所へ奉公させられることになつた、と云ふ評判の出来ごとであります。これが直ちに作者たちの筆に移され、源順の「梅は飛び櫻は枯れぬ菅原や、深くも頼む神

た事は間違ひありません。

かくの如く作者の縷心碎骨して立てた脚色の巧緻は、三味線道の氏神と云はれた初代鶴澤友治郎の琢磨の節付けと相俟つて、「菅原」を今日に至るまで聲價を持續せしめたのであらうと考へられます。殊に初演の人形遣ひ吉田文三郎の考案は菅丞相や、松王、梅王、櫻丸の衣裳に後世までその様式が守られ、彌が上にも本編の聲價を高からしめたのであります。

梗概

菅丞相の舍人梅王丸は、主君丞相が筑紫へ流罪になつてから、御行方不明の御臺所を尋ね所々を漂泊し、或ひは筑紫の配所へ主君を尋ねても見様かか、丁度吉田社の邊りを通りかゝつた所である。ふと出會つたのは弟の櫻丸、久し振りでの對面を喜んだ。聞いてみれば櫻丸は、齊世の君と菅丞相の息女刈屋姫との戀の取りもちをしたばかりに事大事に及び、時平に宮御謀叛など、云ふ讒言をされ、そのため主君丞相は流罪と云ふことになつた。

これと云ふのも皆おのれのなす業と、切腹まで思ひつめて居るのだが、今年七十になる親白大夫の賀の祝に心ひかされ、今日まで面目なくも生きながらへて居るのだ、と語るのだつた。

折柄、本院の左大臣時平公吉田への御參籠とあつて、隨身青侍を前後に大路も狹しと、乗物を軋らせて來たのであつた。兄弟は主君の敵の時平に思ふ存分恨みを晴さうと、その牛車の前に立ち塞がつた。

主人の威を笠に罵り立てる供のものたちを投げ退け、時平に迫らうとすると、その中に三人兄弟の中の松王丸が居た。松王は早くから時平公に仕へ今では兄弟と敵味方になつて居るのだ。松王は兄弟と一つ心でない忠義の働きお目にかげんと、時平の車を押出さうとして二人と争つた。それを猶もやらぬと押戻す兄弟、と見る間に、車の内が搖らいで、御簾も飾も踏折り赫々たる面色で現はれたのは時平の大臣であつた。時平は聲あらゝか



に、轍にかけて轢殺せ、と轍をもつて打ちかゝつて来る兄弟を睨んだ。その眼光のものを凄さに、追の梅王櫻丸もたぢ〜と五體のすくむ思ひで、無念々々と齒嚙みをするばかり、松王は、これを見て我が君の御威勢見たか、猶手むかひせば御目通りで只一と打ち、と刀の柄へ手をかけるのを、大臣は止めて、血を流すは社參の穢れ、助け難い奴なれど松王が忠義に免じ助けてくれる、と嘯くので、それに従ひ松王は、よい兄弟を持つて命拾ひをした禮を云へと罵つた。梅王櫻丸はくわつとせき上げ、言ひ分はあるが親人の七十の賀の祝儀が濟むまで助けて置く、と互に意趣を残して立ち別れるのであつた。

この三人兄弟の父親は、四郎九郎と云つて、菅丞相の領地佐太村に古くから住んで居て、人にも律義一遍の老爺として知られて居た。丞相の下屋敷の庭には、公の御愛樹の梅松櫻があつたがこれ

の世話や庭掃除を承り、至つて氣樂な年寄仕事にその日を送つて居たのだ。

今日は四郎九郎の七十の誕生日、賀の祝とて、朝から近所へ餅のくばりものなどして心ばかりの内祝をしたのであつた。それに菅丞相から七十を祝はれて白太夫と云ふ名を頂いたので、今から名を改めることにしたので。目出度いと云つてこの老爺の自慢は、七十の長生きばかりではない。珍らしい三つ子の父親であることだ。その爲め襟裡さまから御扶持まで頂き、かうして安樂に暮して行けるのが近所の者へも鼻が高いのだつた。

今朝近所の十作に配つた祝ひの餅には、酒を添へるかはりにと、茶釜で酒をうつつてあつたのも、もの堅い白太夫のしるしだつた。

今日ほめでたい三つ子の兄弟が此處へ集まることになつて居た。一番先きに顔を見せたのは、櫻丸の女房の八重だつた。續いて梅王丸の女房の春と、松王の女房の千代が、来る道々今日の馳走に

と、嫁菜やたんぼなど春の草を隈みながら来るのも、のどかなけしきだつた。

三人集つた嫁同志仲も睦しげにあれこれと料理をはじめると、白太夫は嬉しげに見て居た。が氣にかゝるのは伴たちが未だ來ないことだつた。噂に聞けば先日、時平公の車先きで兄弟三人の大喧嘩、一度に生れた兄弟ながら、心は別々なのが白太夫には物足らなかつた。

女房たちも良人の來るのが遅いので、氣を揉むのだつたが、時刻がうつると白太夫は、庭の梅松櫻を兄弟になぞへて、これに膳を据えさせ、その前で子供に云ふ様祝儀を述べた。

八重は新しい三寶土器、春は梅松櫻を描いた三本の扇、千代は白太夫の頭巾、とそれ／＼心を盡した祝物を舅に贈るので、白太夫も大喜びで兄弟たちが来るまでと、八重を連れて氏神詣でに出かけるのだつた。

その後へぬつと入つて來たのは松王だ。梅王も櫻丸も主無し扶持はなれ用も無いのに何故遅いと、憎々しげに云つて居る所へ梅王が急いで來た。この間の意趣と云ひ、又もあてこすりや悪口が始まるので、短慮な松王は聞流さず、兄弟揃ひあひの喧嘩になつてしまつた。その拍子にぼつきり折れた庭の櫻の立木、これがめでたからざるこの前兆とは、後になつて知れたことだつた。

其處へ歸つて來た白太夫は、櫻の折れたのも、誰の仕業と咎めもせず、呵る所をしからぬ心の底には何か曰くがありさうだつた。

今日の祝儀を述べた梅王松王は、各々懐中から何やら願ひ、と一通を父親の前に差出すのであつた。それは、梅王は筑紫へ下つて菅丞相に奉仕たいと云ふ願ひ、松王は何を思つてか勘當を受けたいと云ふ願ひだつた。

白太夫は梅王の願ひは許さない。御行方不明の

御臺所、若君を尋ねよ、配所の御奉公はこの白太夫がする、と云ふのだ。松王には、天道に背く不孝者望み叶へてとらせると、松王夫婦を追ひ出してしまつた。梅王夫婦も望みが叶へられないので詮方なく、あとを八重に頼んで出て行つた。

あとに一人残つた八重は、未だ來ない夫の櫻丸を案じて居る所へ、奥の納戸から靜かに愁ひを含んで出て來たのは、當の櫻丸だつた。白太夫はしほしほと小脇差を三寶に乗せ、櫻丸の前になほした。八重は又胸り、様子を聞かせてと、たゞ泣き出すより他に術は無かつた。

實を云へば、櫻丸は今日朝早くからこの家へ來て居たのだ。櫻丸はかねての覺悟の切腹を今日と思ひ定め、父親に相談したのだつた。櫻丸が姫君と齊世親王の御文使ひをしたのが機縁となり、菅家は没落今日の仕儀に及んだ。その申譯けの切腹義理堅い親白太夫も、それをよしとしたのであつ

た。しかし親の身として、少しでも命を延ばしてやりたい念願には、祝儀に貰つた三本の扇を氏神の神前に供へ、命乞の御籠を引いたのだつたが、それも仇となつた。歸つてみれば庭の櫻は折れてゐる。白太夫も、もうこれ迄と諦めて腹切り刀を我子に與へたのであつた。

この上は、潔い最期を、とその介錯に立つた白太夫は、刀では無く鉦と撞木を取出した。

打ち鳴らすしどろな鉦の音に、念佛の聲も亂れ櫻丸はその中に刃に伏した。夫のあとを追はうとする八重を止めたのは最前からも蔭に隠れて様子を伺つて居た梅王夫婦だつた。

白太夫は櫻丸の亡骸や八重のこと迄梅王夫婦に詳しく頼み、菅丞相の御跡を慕ひ、筑紫の配所へと旅立ち行くのであつた。

芹生の片山里、手習ひ師匠武部源藏夫婦は、丞相の一子、菅秀才を我が子に仕立てかくまつてゐ

た。

今日は新しい寺入りの子もあることゝて、妻の戸浪は、大勢の寺子たちを勵まして手習をさせて居た。

其處へ、どうやら様子ありげな女房が七つばかりの男の子を連れて訪れた。名前を聞けば小太郎と云つて、菅秀才とは同じ位の年配の、賢し氣な子であつた。今日からよろしく、とあるので戸浪はかねて源藏から話のあつた寺入りの子だと悟つた。母親はそゝくさと隣村まで行つて來ると出て行くので、後を追ふ子をなだめつゝ機嫌を取るのであつた。

間もなく外から歸つて來る主の源藏、何時になく顔色も青ざめ、思案の腕組みも不機嫌に、出迎への寺子等を、づゝと見渡したが、いづれを見ても山家育ち、世話甲斐もない役立たず、と思ひあり氣に不興な口をきくのだつた。

夫の顔色の悪いのを見てとつた戸浪は、山家育

ちは知れてあること、それより機嫌直して約束の寺入りの子を見てやつてくれ、と小太郎を引合はせた。と、いたいけなくも手をつけて挨拶をする小太郎の顔をじつと見つめた源藏は、忽ち顔色も柔いで、器量すぐれて氣高い生れつき、公卿高家の子息と云つてもおそらく恥かしからず、ハテ、扱、そなたはよい子ぢやなア、と喜ばしげにほゝゑんだ。

合點の行かぬ夫の様子に、子供たちを奥へやつて、戸浪は源藏に今日の仔細を尋ねた。

仔細と云ふのはかく／＼であつた。今日村の饗應と云つて呼ばれて行つたのは偽りで、庄屋方へ行つてみると、時平の家來春藤玄蕃に病體ながら松王丸が檢分の役として附添ひ、數百人の人數で源藏を取巻き、訴人によつて源藏方に菅秀才がかくまはれてあること明白、直ちに首打つて渡すかさなくば踏み込んで請取らう、と手づめの詰問だつた。源藏も是非に及ばず、首打つて渡す、と約

束して歸つて来てはみたものゝ、それは誰か寺子の中に身替りに立つものもあるかと思案の揚句、どれもこれも、育ちのよい菅秀才とは似ても似つかぬ子供ばかりで、若君の御運もいよ／＼つきる日が来たかと慨いてゐたのだつた。すると今日寺入りの小太郎を見れば、満更烏を驚とも云はれぬ器量に、これこそと、思ひ當る所があつたのである。

戸浪はこれを聞いて、松王は若君の顔をよく見知つて居る筈、と心配し出すのだつたが、若し實と知れた時は、松王めを眞二つ、叶はぬ時は若君諸共死出三途の御供せん、と夫が腹を据えるので夫婦は、やがて來る玄蕃、松王を待ち受けることになつた。

文樂座小史（昭和十八年調査）

- 竹本座創立（現今ヨリ二百五十九年以前）
貞享元年二月（道頓堀西ノ芝居）
- 文樂座發祥（現今ヨリ約百五十年以前）
天明年間淡路ヨリ植村文樂軒大阪へ來ル
- 第一次稻荷社内時代
文化八年ヨリ天保十三年ニ至ル
- 西横堀新築地濱時代
天保十四年ヨリ安政三年ニ至ル
- 第二次稻荷社内時代
安政三年ヨリ明治四年ニ至ル
- 松島千代崎橋時代
明治五年ヨリ明治十七年ニ至ル
- 御靈神社内時代
明治十七年ヨリ明治四十二年ニ至ル
- 松竹合名社繼承
明治四十二年三月植村家ヨリ繼承
- 御靈文樂座燒失
大正十五年十一月二十九日
- 隨時興行時代
昭和元年ヨリ昭和四年マデ道頓堀辨天座ヲ始メ其他隨時興行
- 四ツ橋文樂座創立
昭和四年十二月以來現在ニ至ル

龍

人形役割

神
桐竹
紋
十郎

野鶴	豊澤	豊澤	豊澤	竹鶴	豊竹	竹本	竹本	竹本	竹本	豊竹
澤	澤	澤	澤	澤	竹	本	本	本	本	竹
錦	清	仙	勝	新	團	道	宮	雛	源	南
			太	太				太	太	太
糸	友	郎	郎	郎	六	八	夫	夫	夫	夫



龍

【夜の部】

西亭作詞並ニ作曲 阪東三津之丞振付
 大塚克三舞臺裝置 村田芳生舞臺照明
 勅題海上日出に因みて

新作 勝舞龍

(床本)

そもくこれは八汐路の千尋の波の底深く四海を鎮め
 護るなるこの龍宮に年経るゝ仕へまつれる龍女なり。

我れ悠久の昔より治まる時津風、この有難き神國のそ
 の古事の今爰に、おさく申すぞおそれあり。

それ千早ふる神代の昔天地雷明震動く、雲霧蔽ひ重なりて、
 天水爲に紛紜たり時に御神示現あり、天明水澄と
 分ちあるこれ國常の神とあがめ申すぞ尊けれ。

其後七代の御時に諾冊二神なりまし給ふ、二尊は天の
 御弟もて天祖の御教へ浮橋に立たせ給ひて海原をかき分
 け申し奉れば、時に御矛のしたたりに凝り固りて生れし
 はこれぞ八州の豊國なり。

扱も國土の鎮まりて地神の始めと曰さくは申すもおそれ
天照大神にてましますなり、それより五代の千代と經て
神むと皇との道直ぐに今も妙なる秋津州御影ぞまこと有
難きそも浮橋の古しへの神歌に鳥羽玉の我黒髪も亂れず
に結び定めとゝの給ひて日月雨露の御ン恵み雷神風神龍
神の各神ゝの現れて神徳を衛護し給ふにぞ、空には五雲
柵引きて風も治まる四海波八汐路はるか青海の春は女浪
の靜やかに、月の光りの影澄みて夜遊の舞樂、ふる袖は
汐の引く手の和けさ、秋は男波と寄す波に濱の砂もたわ
むれて悦ぶ聲は松風の蕭條たりける笛の音實に面白き和
田の原、女浪男浪の陸のおどろくゝと鳥る音は、四季
を壽く調べにて聲萬歳と和しにける。

さるにても時にこれ正像過ぎし末古の頃、世も弘安の
四ツの年、西の小島を突き進み、皇土に迫る荒風の寄せ
たる夷十萬勢、畏れ多くも皇の討夷の詔かしこみて、時
の勇將時宗は、筑紫隼人の兵達、老も若きも女子もなく
打物取つて馳せ向ふ、八面六皮の勢ぞ頼もしさとも頼も
しゝ實にくゝそれよ其時なれくゝ我國の理りや、などが
御加護のあらざらん、幾百龍も吟ずれば、黒雲雷鳴凄じ

く怒濤は山と逆卷くに敵の軍船木の葉と散り、水底深く
白波の蕩くずとこそはなりにけり。

其時上がる勝鬨の聲は萬里の波の果てとふくゝとこそ
響きけり、とふくゝとこそ響きけり。

されば秋津州日ツ本は天日出づる神國なり、やはか夷
敵にけがさんや。

今又四海に打ち寄する不敵の夷討ちくだき、この波風
を治めんと、神意の命に時を得て我れ今爰に龍神と化し
て昇天いたすなり。

元より二身一體の龍神龍の通力は飛行自在に嵐を蹴
立て、雨風を起し雲を呼び逆卷く汐の廻ると共に天空は
るか舞ひ上れば龍宮の燈火煌々と一天日月光明神天兩光
一如となりかどやく光り明かに奏でる樂の音につれて行
衛も知れず飛びにけり、行衛も知れず飛びにけり。

伽羅先代萩

竹の間の段
御殿の段
床下の段



竹の間の段

竹本 伊達太夫
野澤 喜左衛門

人形役割

乳母 政岡 吉田文五郎
妻 八汐 桐竹門造
女醫 小卷 桐竹紋太郎

梗概

伽羅先代萩は安永六年四月奈川龜輔の作で、初めは歌舞伎に書卸されたものでありますが其後操り芝居に改作されたものであります。次いで天明五年正月江戸堺町結城座の操芝居に上演されたものであり、作者は松貫四、吉田角丸、高橋武兵衛等で、今日演ぜられる先代萩の原作であります。その時の名題は奥州秀衡遺跡争論、伽羅先代萩で豊竹若太夫、竹本町太夫、喜代太夫、文字太夫等が出場して居ます。この竹の間は中樞の御殿の前提として、政岡、八汐、沖の井、小牧、鶴千代忍び、膝元等が賑やかに出場して政岡苦忠の躰を固めさせます。

奥州五十四郡の城主伊達義綱は江戸の吉原の傾城高尾太夫に溺れ國政を顧みない所から、奸臣仁木彈正はじめ悪人一黨は、公儀へも憚りありと義綱を隠居させ幼君一人のお家横領を企て、居た。

妻 沖ノ井 桐竹龜松

鶴喜代君 桐竹小紋

一子千松 吉田玉男

忍 び 吉田多三郎

腰 元 大ぜい

御殿の段

豊竹古鞞太夫

鶴澤清六

人形役割

乳母 政岡 吉田文五郎

一子千松 吉田玉男

鶴喜代君 桐竹小紋

幼君の名は鶴喜代君と云つた。乳母政岡は幼君を

守つて居たが、彈正はじめその一黨の奸策は幼君

の身に迫つて居た。幼君毒殺の計が着々とすすめ

られて居るのを政岡は知つて居た。それ故幼君の

たべ物もすべて御殿で自ら炊いて差上げて居た。

もう一時も油斷のならない状態だつたのである。

政岡には一子千松と云ふものがあつた。千松は

鶴喜代君のお相手役として御殿へ上つて居た。

今日も御殿で千松が、侍の子はひもじいめをす

るのが忠義、食べる時は毒でも何でもお主の爲に

はたべる、と云ふのを聞いて、我が子ながら健氣

なも〇よと涙ぐんだのであつた。

政岡がいつもの様に幼君の御膳を拵へて居る間

千松は雀の唄を歌つて、幼君の御機嫌をとつて居

た。縁先に出した雀の籠には親雀が餌をはこんで

居る。これを見た鶴喜代君は、雀がうらやましく

てならなかつた。そして又、御膳の残りを頂く狎

がこの上なくしあはせに見えるのだつた。政岡は

妻 八 汐 桐 竹 門 造

女 醫 小 卷 桐 竹 紋 太 郎

妻 沖 の 井 桐 竹 龜 松

榮 御 前 吉 田 榮 三

腰 元 大 ぜ い

床 下 の 段

豊野伊勢太夫
竹澤勝太夫
野澤叶太夫
竹本錦糸夫

人形役割割

仁 木 彈 正 吉 田 玉 助

松 前 節 之 助 吉 田 光 造

この様子を見るにつけ、聞くにつけ若君のお身の上
に涙をしぼる他なかつた。やがて御膳も出来た
千松の毒味に喜んで握飯をたべる鶴喜代君の心根
を政岡は勿體ないものに思つた。

折から梶原様の奥方御入りなり、と云ふ聲に、
政岡はこれを訝しんだ。何はともあれお通し申せ
と千松にはいつもの事を云ひ含めて奥へやつた。

やがてしとくと一と間へ通つたのは榮御前、
政岡はじめ沖の井八汐もこれを出むかへた。

榮御前は夫梶原に代つて鶴喜代君の病氣見舞に
來たのだつた。それに持參の菓子折は頼朝公より
の下され物と云ふのだつた。

前段に於て政岡が手に入れた悪人輩の連判狀を
鼠に姿を扮して御殿に入込んだ仁木彈正のために
奪はれてしまひます。その鼠を捕へた松ヶ枝節之
助が只の鼠でないと頭に鐵扇で一撃を與へると持
妾の仁木彈正が眉間を割られ連判狀をくはえて御
殿を遁れてゆくといふ條りであります。

此処樽下

曲豆竹右靴

不夫

相勤甲花



上巻

か、さん、こ、明け、
お



攝州合邦辻

合邦住家の段

安永二年（二四三三）二月、大阪北堀江座初演。作者は菅專助、若竹笛朝の合作。全曲は上下二巻より成り、上の巻は發端があられの松原毒酒の場、中が高安館、切が繪旨取戻しの場、下の巻は口が天王寺西門の場、切がこの合邦住家の段に分れてゐる。

合邦住家の段

梗概

前 竹本 南部 太夫
鶴澤 寛 治 郎
切 竹本 織 太夫
鶴澤 清 二 郎

安井合邦の娘お辻は、氏なくして玉の輿、河内の國の領主高安左衛門の後妻玉手御前と云はれる身になつた。

所が如何なる天魔が魅入つたのか、義理ある先妻腹の子俊徳丸に想ひを寄せ、何かと云ひ寄るので、俊徳丸は道ならぬ戀に堪えかねて、許婚の淺香姫と手をたづさへ、玉手の親の合邦の庵室へと

人形役割

親	合	合	玉	俊	淺	奴
合	邦	入	手	德	香	入
邦	女	平	御	丸	姫	平
吉	房	吉	前	吉	桐	吉
田	桐	田	桐	田	竹	田
榮	竹	玉	竹	榮	紋	玉
三	政	德	紋	三	司	德
	龜		十	郎		
			郎			

身をさけたのであつた。この事を知つた玉手は、尙も俊徳丸の後を慕つて、合邦の庵室まで追つて來たけれど、合邦は俊徳丸から娘玉手の邪戀を聞かされて居るので、高安殿への義理を思ひ、どうしても門口も踏せぬと、内へ入れやうともしなかつた。

然し追に母は女の身の心弱さから、玉手を幽霊と云ふ事にして、幽霊ならば入れても仔細はありませんまいと合邦を説き伏せ、漸く内へ入れて不義の云ひ譯けを聞かうとした。と玉手は云ひ譯けどころか、「思ひ切られぬ戀の道、俊徳様の御行方尋ね、女夫にして下され」とかき口説くあり様なので、合邦は今更の様に呆れ果て、俺も以前は青砥某と云ふ歴とした武士、浪人しての捨坊主ながら、誠の道を通して來たに、と怒り立ち、唯一刀に斬つて捨てんとした。

母親は、これをなだめ、必ず娘に思ひ切らせて見せますと、玉手を無理に奥の一ト間へ連れて行

つた。

折柄奴入平は俊徳丸の後を尋ねて來たのだつたが、フト玉手の姿を見付けて、様子をうかゞはんと傍に身を忍ばせて居たが、一ト間から兩眼盲た俊徳丸が、淺香姫に手を取られて、なよ／＼と現れるので、入平は、斯くまで玉手御前が執念深くつきまとふ上は、一刻も早く此の家をお立ち退きあれかしと、既に伴ひ出やうとした。

その時玉手は奥から走り出で、俊徳丸に取り縋り、入平の意見の言葉も耳に入らず、又しても切ない戀をうつつたへるのだつた。

これを耳にした合邦はたまりかね、一刀脇腹深く刺し通し、その息の根を止めやうとするので、玉手は是を、しばしと止め、痛手に悩みながらも「是には深い様子のあること」と、自分の苦衷を物語つた。

それは、高安の妾腹次郎丸が、奸臣坪井平馬と心を合せ、己が家督が繼がんものと、その爲に俊

徳丸の一命を奪はんとしてゐる事を知つたので、心にもない戀をしかけ、毒酒に形相を變へさせたのも、御家督さへお繼ぎなくば、お命に別状なからうと、思ひ餘つての思案だと云ふのである。そして又、かうしてお後を慕ひ参つたのは、此の病を本腹させるため、と云ひつゝ手にする鮑貝を出して、寅の年月揃つた我が血汐を盛つて、俊徳丸に飲ませると、不思議や人相はもとの通りになるので、一同は初めて玉手の苦計を知つて今更涙にくれるのだつた。

その時には、もう玉手の最期は近づいて居た。合邦が取り出す百萬遍の珠數の輪の中で、玉手御前は、一同に見守られつゝ、大往生を遂げたのであつた。

開演毎に一方ならぬ御後援御來觀を賜り厚く御禮申上ます

當文樂座は 既に皆様御承知の通り我大阪に於ける郷土藝術、三位一體の人形淨瑠璃の日本唯一の公演場でゐる。

文樂座人形淨瑠璃は 嘗に大阪の誇りとする舞臺藝術のみならず我

日本に於ける古典舞臺藝術の至寶として世界に誇るべきものであります。従つて開場毎にこの大使命が全う出来ませうやう、皆様御期待に

背かね様、皆様御満足して頂けるやうと一同不斷の努力を致して居りますが尙御す氣付きの點は御客様の御聲として承りたく存じます。

御携帶品は 正面一階に御預り所が御座ります。お帽子は椅子の下に設備がありますからそれへお預り致します。お歸りは混雑致しますからお服物は成べく終演一幕前に御受取願ひます。

貴重品は 各自にお持ち下さい。お場席お立ちのときは御携帶願ひます

お煙草は 一階、二階廊下に喫煙臺を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひ致します。お席では御速慮下さい。

お食事は 西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室が御座ります。

賣店は 二階東側と一階西側休憩所に御座ります。

お化粧とお手洗 殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座ります。

場内にて 寫眞撮影は絶對にお断り致します。

御休憩の間は 一階西側に給茶處と二階西側に大休憩所の設備が御座ります。辨當御持参の御方は何卒御利用下さい。

お出口は 下足礼赤札は正面西本家入口でお渡し致します。黒札は正面入口東側でお渡し致します。

案内人は 胸に番號入マークを附けて居りますから御用の節は御申附け下さい。其他一般従業員に不行届の點は御遠慮なく御注意の程お願ひいたします。

出演者 病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相助めますから豫め御承願ひます。

◇皆様へ御案内◇

當座は此度皆様へのあらゆるサービス機關として 案内部を特設いたしました。

人形淨瑠璃についての御質問、各種團體御觀賞會、又は諸種の御會合席上へ出張公演等御相談に應じ、よろづ御案内申上げる事に致しました。御一報次第器上、どうぞ御利用下さいませ。

専用電話南 〇三七八八番

松竹株式會社

文樂座

支配人 下村清次郎

昭和十八年十二月廿八日印刷
昭和十九年一月元旦發行

大阪市南區久左衛門町八番地
發行所 松竹株式會社 大阪支店

大阪市南區久左衛門町八
松竹株式會社大阪支店内
發行所 鳥江

一 部
金 二 十 錢

